



ある幼稚園児を中心とする

治療活動

佐 治 守 夫



この問題が私のところにもちこまれたのは、もう秋の色も濃い十月の末のことであった。ある幼稚園で、とても困ったことがおきていて、園長先生以下困惑しきっているというのである。この幼稚園では、今年になってはじめて、三十人ほどのクラスを二人の先生が一しょにうけもつことにしたのである。その理由は、この幼稚園に はじめて就職した、大学をでたばかりの若い女の先生に、ここでの やり方を実際に学んでもらうために（これはこの若いA先生自身の希望でもあったのだが）、この幼稚園でのエキスハートである女の先生——B先生——のクラスに参加してもらおうという形式をとったことに始まった。B先生は園内のすべての人に、有能な先生だと認められていたし、そして同時に、卒直な言い方をするあげっぱなしの人柄だということも、すべての人の認めるところであった。それに対して、A先生は熱心な若手であり、幼児のペースナリテイ発達についての最近の理論と、精神的健康を重視しなければならないという彼女自身の考え方にもとづいて、自分なりの園児教育の理想にもえていた人であった。この二人の先生についての知識や印象は、園長先生からの話と、二人の先生との直接の接触から得られたものである。

私のところに園長先生からの紹介状をもってたずねてきた若いA先生が、このクラス全体の問題になっているひとりの少年のことを詳しく話してくれて、どうしたらよいかと真剣にたずねた。この少年は、クラス全体でやる、どんなことにも参加することができない

し、ひとりであればまわって他の子どもに乱暴したり、床にひっくりかえったりする。A先生が、この少年の家庭の事情をしらべたところ、父と母が別居しており、少年は父の事を聞かれると、不機嫌になって床にひっくりかえったり、じだんだふんだりする。いつも、あまりにも手におえなくあばれるので、とうとうA先生は、この少年の事で園長先生になきついてしまった。こんなことが数回くりかえされて、とうとう問題が大きくなってしまったのである。相談をうけた筆者は、この少年をある教育相談所に紹介し、遊戯療法をうけるようにすすめた。そして幼稚園の先生たちの誰とでも、時間のゆるす限り筆者が相談にのる準備のあること、もしできれば、子どものお母さんも、教育相談をうけたらよいのではないかと思っていることなども同時にA先生に話した。

〈母親との面接〉

この子どもが母親につれられて、治療をうけにやってくるまでには、いろいろな問題があったらしい。幼稚園の先生からのすすめがあっても、母親は多忙であるとの理由をたてに、なかなか承知しなかった。母親は自分の子どもの問題で、家の中の個人的なことではかくのは真つ平だと考えたらしい。「何しろ父親が父親なもので、おはずかしいことばかりです。子どもがあんな手におえない子どもになったのも、もとはといえば父親がわるいんですから」というのが、子どもをつれてきた時の、母親が面接者に語った第一番

目のことはだったのだから。

母親は臆病に、しかし次第に明瞭に自分の感情をこめて、自分の家庭の事情や、そこにおかれた自分の立場を語りだした。しかし初めの数回（一回一時間の面接）は、父親がわるいこと、子どもがいけないこと、具体的な事実を列挙して、自分がいかにその点で苦勞してきたかを語るのについやされた。父はこの少年が生まれたばかりのまだ赤ん坊のときから、殆んど家によりつかなくなった。他に女がいる。今は別居同然で、月に数回しか家に帰ってこない。経済的には、何とかやっつけていけるだけの金を毎月いれてくれるし、その点では他の家庭なみにやっつけていける。父にその点での働らきはある。他に家庭をもっていて、どっちも維持していけるんだから、浮気するくらいは当然だろうと虫のいいことを父はいう。父親は低級で不潔な人間である。しかしはっきり離婚することは、生活の上でも不安だし、この少年と、その二つ上の女の子を父なし子にしてしまうと思うと、決断しきれないのである。

母親のこのような父に対する感情は、父の行動を一部は認している反面で、どうしても許せない強い底流をもっている。しかし、この反感をぶつけて、完全に父からすてられてしまう不安を感じると、思いついて自分の気持を主張できない弱さが先に立ってしまうのである。そしてこのような不満やいらだちが、二人の子どもに対するなみはずれた期待、依存、きびしいしつけなどになっている、と考えられる。

「あんな父親みたいなものになってもらっては困るし、そうでなくても隣近所からいろいろわきまされているのが耳に入ってもくると、子どもたちだけでも人に何とかいわれたりしないようにしたいと、ひとりで苦労しているのに、……あの子はちっとも素直じゃない。」

という母親のことばは、この子どもたちにだけ賭けている母親の気持を明瞭にあらわしている。

面接者（治療者）の態度

このような母親に対して治療者はどのようなことができるのだろうか。治療者のとる基本的な態度は、治療者がどのよう、な人に対したときでも、常に变りないのである。後にのべる、子どもの遊戯療法の場面での治療者の場合でも、幼稚園の先生の相談にのってあげる相談助言者の場合でも、この同じある態度が要求される。面接者あるいは治療者が一定の態度を保持するならば、クライエントに、ある建設的な、人格及び行動の変容を起させることができるということが、根底にある考え方なのである。

治療ということ、援助を求めてきている人びとの中に、ある建設的な変化を期待するということを考えるとき、多くの人の考は、「どうしたらこのような問題をもつ人を処置し、治療し、変化させることができるのだろうか」ということだろう。しかし面接者としての問いかけは、そのような形とはちがって、「どうしたら、この人自身が、自分自身の成長や発展のために利用できるような関係を、相

手に提供できるだろうか」ということなのである。

この母親のように悩んでいる人を助けるために、知的な教えや訓練という方法は無力であるということをも、多くの治療者たちは学びつつある。子どもの問題についての知識を与える、訓練によって子どもの扱い方になれさせる、教わったとおりに子どもを扱うように指導する、このようなやり方は役に立たない、こういうやり方は一見魅力があって直接的におもえるので、以前は多くの治療者がこういうやり方にたよっていた。ある人にその人自身のことを説明したり、もっと満足できる生活の仕方を示唆したりすることができる。

しかしこのような方法は、せいぜい、相手を一時的に変化させることができるだけで、すぐ役に立たなくなり、その効果はすぐに消えて、その人は前よりも更に自分の無力を痛感し、より深い絶望におちいってしまうだけになる。

面接者は母親との関係の中で、母親のどのような感情に対しても、それが母親の心の世界の中で必然的なものであることを理解し受容しようと努力した。受容ということは、その相手の条件、行動あるいは感情がどうであろうとも、それにはかかわりのないひとりの独自の存在の人間として、それに対して暖い好感をもつということである。このことによって母親は、この治療者との関係を、安全感のある、自己の探求について母親は、この治療者との関係を、安全感ができるようになる。この態度の根本には、人間一人ひとりの世界に対する尊敬と、人間の中に内在する成長し発展する力への認識と

が深くよこたわっているのである。

十回の面接のあとで、母親は、自分が父親や子どもにだけむけていた非難の目が当を得たものでないことを知るようになった。これは知識の上での理解にとどまらず、自分がこのような態度を今までとらないではいられなかった内心の不安定さを十分に自らうけ入れることができるようになった自己受容の態度にもとづいていいる。

「子どもたちにきびしくしていた自分が、今考えてみると、自分の不安というものの表現だったし、父にむけられなかった不満のやつあたりみたいな姿だったことがよく分るんです。子どもをせめる前に自分の姿を正しくしなくちゃあと今は思うんです。」この母親のことは、この新しい認識と、それにもとづく新しい母子関係を示すものである。

〈子どもの遊戯療法〉

子どもの治療にあたった他の治療者は、同じような治療関係を子どもとの間に発展させていった。子どもは充分ことばを用いて自己の世界を表現することはできない。ここでの表現は、玩具を用いての、遊戯を通じてなされる。この子どもはこの場面を通じて、自分の内面におさえつけられ、あるいは自らおさえつけていたものを自由に表現し、それを自ら吟味しうけ入れていくことを知っていた。今まで知っていたおとなたち（特に母や父によって代表されるおとなたち）とはちがって、治療者は何の批判も非難も加えない許

容的な態度で自分に接してくる治療者の前で、今までみたまされなかった内心の欲求、特に攻撃的欲求を充分表現することができていった。水を部屋中にまきちらし、洪水の場面をつくりだすときのこの子どもの欲喜の言動は、我々の理解や推察をこえていた。ここで彼は、父親のいない家がつまらないこと、母がいつも叱ってばかりいてちっとも他の母のように一しよにあそんでくれないことを、断片的に治療者に語りかける勇氣をもった。子どもにとつて新しいこの態度は父の人形を攻撃的な態度で扱うことをちゅうちょしなくなるのと前後してあらわれている。「ぼくは幼稚園が好きなんだよ。だけど、幼稚園の先生がお母さんみたいに叱るから、いやなんだよ。」この深い意味にあふれたことばを、八回目の遊戯治療の場面でぼそりと語った子どもは、ひどくてれくさそうな、しかし、その一瞬あとでは、ひどくはればれとした顔をしたのであった。

母と子の二人の治療は十一回目で終わった。幼稚園での問題行動の消失と、母の子どもを扱う上での自信の増大がこの終結をもたらした。しかし同時に四回にわたるA先生と治療者との面接を通じての、A先生の子どもに対する態度の改善もみのがすことができないと思われる。

〈A先生との相談助言関係〉

A先生は前述のように、新しい意欲にみちてこの幼稚園にやってきた。そして何か旧態依然のようにみえるこの幼稚園の子どもに

対する扱い方に、いいしれない不満を感じはじめた頃、この少年の問題が表面化してきた。この事情を語りながら、A先生は、B先生に対する自分の競争心が、この少年をはさんで存在していたこと、自分なりのやり方で何とかうまくやろうとする野心が、B先生との間隙をつくりだし、それがこの少年をなおさら不安定にしていたのかもしれないことを気づいていった。「そういうえば、私が何かこの子にしてやろうとして、B先生がそばでそれを見ているといった場面です。この子があばれだして手がつけられなくなるといいうことがよくあったように思います。」A先生はこの事に気づくと共に、B先生と一しよの場面で治療者と話しあいたいと提案し、治療者は一日幼稚園をおとずれて二人の先生と一しよに話しあい、この少年を含むグループを観察する機会を得た。B先生に対するA先生の競争心は、どうもA先生の中だけでの空まわりだったらしい。それはその日のあとでA先生自身が認めたことであり、治療者もその発表を素直に認めることができた。

A先生は面接が終る時の感想としてこんなことを語ってくれた。「子どもをよくしようと考えていたはずの私は、自分の感情にとらわれてしまっていたことに気がついていなかったんです。あのお母さんが悪い、あの子が問題児だと思っていた私は、お母さんが子どもやお父さんを非難し、自分の事を忘れていたと同じようにせまくなっていたんですね。私も小さい時に、父が死亡して、父のない子どもとして育ちました。あの子に特別な関心をもったのは、あの子

が同じような境遇にいたためだったのかもしれない。やっぱり自然な好感というものからでた態度で接するのではないと、子どもをゆがめてしまうことを知りました。」

少年は今とても元気で、もう問題児として注目されるのではなく、いい意味でのクラスのリーダー的存在に近づいているようである。母親は父親との関係をどう精算すべきかについて、その後二回ほど治療者のもとを訪れて相談していった。まだ結論には達していない。しかし母親の気持は、前のように子どもを道具に使う世間体を考えるとか、自分の体面とかにこだわることははるかに少なくなっている。母は最後の時にこう言った。

「今さらお父さんをどうしようもないんだと思っていた前の私は、勇気がなかったし、自分の本当の気持を知るのが恐ろしくて、みまいとしていたんです。女遊びをするくらい男でないと頼りにならないなんていう古いことばをいつも思いだして、自分がお父さんをゆるせないと思う気持と、お父さんから離れてはやっていけないと思う気持の戦いをごまかそうとしていました。今はもう一度はつきりさせなくちゃならない。その機会を見つけたかと思っています。」

「自分の中の感情に直面することを恐れず、その感情の中にある自分自身をうけ入れるようになること。母も子どももA先生も、一人ひとりがこのような姿に近づくように変化していったところに、この問題の解決のいとぐちがあったのである。」